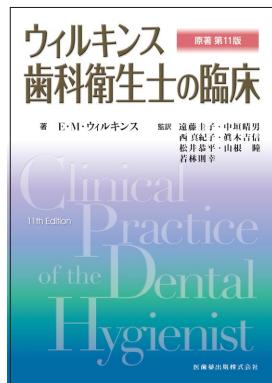


「歯科衛生過程」に基づく 歯科衛生教育と臨床のバイブル



ウィルキンス 歯科衛生士の臨床 原著第11版

E・M・ウィルキンス 著/遠藤圭子・中垣晴男・
西 真紀子ほか 監訳

A4判/1056頁 定価：28,000円＋税
医歯薬出版（2015年7月）

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
口腔疾患予防学分野

評・白田千代子（歯科衛生士）



今回ご紹介する「ウィルキンス 歯科衛生士の臨床」は、米国やカナダの歯科衛生士が臨床現場において教本として使用している書籍です。原著「歯科衛生士の臨床」は、1959年に初版が上梓され、時代の要請に応じて何度も改変されながら、米国・カナダの歯科衛生士に愛されつづけてきました。そして、日本ではこのたび、新たに第11版が翻訳・出版されました。

本書のすべての内容が日本の現状に適合しているとは限りません。しかし、臨床現場で活躍している歯科衛生士の皆さんが本書を読むことで、日本の歯科臨床を再度見直すことができるでしょう。また、それぞれが得意とする専門分野はもちろん、直接かかわりのない周辺領域や、大学の歯科衛生教育の最新情報などを学ぶこともできます。同時に、米国やカナダの歯科衛生士臨床を日本のレベルと比較したとき、日

本のレベルが決して低くないことを認識できることでしょう。

休職中の歯科衛生士にとっては、現場復帰に備えるための復習教材や、復帰以降の参考書として、おおいに役立つことと思います。また、歯科衛生士になるために勉強中の学生なら、歯科衛生士の臨床業務のすべてが1冊にまとめられているため、座学の授業はもちろん、臨床実習の際にも、事前に予習をして臨むのにとっても適した本です。

全13編からなり、69章1056ページにもわたりますが、各章の最後には「日々の倫理的考察」や「必要な文書記録」「患者指導の要点」など、臨床において考察すべきことや実践のポイントといった最低限理解しておきたいことがまとめられており、学んだことを消化しているかどうかを確認できるようになっています。また、現在日本の歯科衛生士が海外の歯科衛生士と比較して努力しなければいけない課題、すなわち「歯科衛生過程に基づいた臨床の実施」ができることを目指し、臨床に基づいた研究論文を作成できるようになるために必要な基本的な考え方が示されています。これは、歯科衛生士の専門職としての役割を果たし、エビデンスと倫理に基づいたあらゆる種類の臨床活動を行うためにも役立つでしょう。さらに今回、第57章に在宅患者が取り上げられており、日本だけではなく米国やカナダでも高齢化社会が問題になっていることを実感できます。

特に臨床にかかわる歯科衛生士は、この本を読みながら日常業務に携わっていくと患者さんにも喜んでいただける仕事ができると思います。皆さんがこの1冊をかたわらにおき、開くところすべて理解しているといえるほど、本書と仲よしになっていただけたらと切に願っています。